

## Safety Report セーフティポ 自転車

### Honda FC が育成スクールに所属する小・中・高校生向けに自転車講習会を開催

1971年に創部したHonda FC（本田技研工業（株）フットボールクラブ）は静岡県浜松市を本拠地とし、日本フットボールリーグ（JFL）に所属する社会人サッカークラブである。

サッカーを通してフェアプレイ精神やスポーツマンシップを学んでもらい、心身ともに健全な青少年の育成を目的にHonda FCスクール（以下、スクール）も運営し、育成コースはU-10（小学3・4年生）、U-12（小学5・6年生）、U-15（中学生）、U-18（高校生）の4つの年代に分かれて活動している。今年5月、年代ごとに選手を対象とした自転車講習会を同クラブの練習グラウンド等で開催し、スクールのスタッフや監督がHondaの自転車教育のプログラムを使って、小学生から高校生まで各年代に合わせた指導を行った。

#### Hondaのプログラムを活用し、各年代に合わせた自転車教育を実施

開催の背景について、スクールの校長であり、U-15監督を務める大久保貴広さんは次のように説明する。「練習や試合の往き帰りに自転車を利用する選手が多いので、以前から自転車の安全に関する指導が必要があると思っていました。自転車教育を実施することで選手の安全、さらに地域の安全に寄与したいと考えています」。5月1日はU-18選手（29名）を対象に、Hondaの「高校生交通安全教育指導マニュアル」に従って座学と実技による自転車教育が行われた。座学では、交通安全には「ルール」（従うべき決まり）、「知識」（認識し理解すること）、「マナー」（人に対して思いやる心）という3要素が重要であること、「認知・判断・操作」という運転の仕組みなどを解説。自転車事故の加害者となってしまった場合の責任と、被害者への賠償事例を紹介した。実技はブレーキ練習、8の字走行、反応回避に選手が取り組む。8の字走行は直径10mの円をつなげた8の字コース内に自転車20台が入って走り続けるという課題。最初は20台が入りきる前に8の字の交差する箇所まで接触しそうになった人が足を着いてしまい、止まってしまう。続けるために必要なことは何か、スタッフが問いかけ、「ほかの人の動きをよく観る」「譲り合う」という答えを導き出す。そして、それらを実践することによって、コース内を安全かつスムーズに走行できることを体験する。反応回避はスタッフに向かって直進し、スタッフが上げた手と逆方向に回避するという課題。これを両手でハンドルを持っている時と片手の時で行う。片手運転では、バランスを崩して安全に回避できないことを体験してもらう。

U-18選手の山中さんは「自分で体感しながら自転車の安全運転を学べたことが良かったと感じています。また、交通事故を起こしてしまった場合の対応や責任について、今まで学ぶ機会がなかったので勉強になりました」と感想を語った。

U-18監督の川口剛史さんは「実技は体感しながら考えるという点で選手たちが前向きに取り組んでいました。高校生年代は自立が求められます。座学では自分の行動に常に責任がともなうことを選手は理解できたと思います」と話す。

#### 交通安全をサッカーと関連づけて考えてもらう

U-15（51名）、U-12（19名）、U-10（15名）に対しても順次開催。U-15とU-12の実技はU-18に準じた内容で行われた（U-10は雨天のため座学のみ）。座学では「将来社会で活躍する君たちへ」（P1参照）の自転車編を活



U-12、U-15、U-18の実技で行われた8の字走行。最初は8の字が交差する場所で誰かが足を着いて止まってしまうので、スタッフがどのようにしたら継続できるか選手に問いかける



反応回避は上げた手とは逆方向に進むという課題。両手だけでなく、片手で何かを持っている状態でも体験



ブレーキ練習で左（後）と右（前）のブレーキの使い方を身につける

用し、自転車に乗る中学生の映像を見て、どのようなルール・マナー違反をしているか、考えてもらった。受講した選手からは次のような声が聞かれた。「サッカーのプレーと同じように、適切な判断をするためには周囲の状況を確認することが大切だとわかりました。自転車に乗っている時も、まわりをよく観ることを意識したいと思います」（U-15 伊藤さん）、「左ブレーキで速度を落としてから右ブレーキをかけるなど、自転車も基本が大切だとわかりました。安全に止まるなど、まず基礎的なことをしっかりできるようになりたいと思います」（U-12 白方さん）、「講習を受けて、普段『止まれ』の標識がある場所で、自分は左右を観ていないと気づきました。これからは事故に遭わないよう、止まってよく観ようと思います」（U-10 向島さん）。

小学生年代を受け持つU-12監督の桶田龍さんとU-10監督の庄司太己さんは、サッカーと関連づけて考えることで理解が深まったと感じている。「認知・判断の重要性はサッカーにも通じるところがありました。自転車の運転や日頃の行動に置き換えて考えられ、わかりやすい内容だったと思います」（桶田さん）「よく観るといった安全行動の基本を身につけることは、日頃のプレーにも活かせると思いました。この年代から交通安全に対する意識を高める機会を設けたことに意味があると感じています」（庄司さん）。

校長の大久保さんは「この自転車講習会は、選手にいろいろな気づきを与えたと思います。当クラブでは地域貢献の一環でトップチームの選手が幼稚園や小学校を訪問してサッカー指導を行っています。今後、私たちによる自転車講習会もHondaらしい地域貢献活動として位置づける方針です」という。各年代のチームはリーグ戦や練習試合で他のクラブチームや学校のサッカー部との交流がある。まずは、試合の対戦相手から自転車教育の輪を地域に広げていきたい考えだ。



U-15、U-18の座学では自転車事故の実態や賠償事例などを紹介



「認知・判断・操作」という運転の仕組みを選手に理解してもらう



U-15以下の座学では「将来社会で活躍する君たちへ」を活用